

感想評 2016・2・7公演 37回 kyoto 演劇フェスティバル参加作品
ミュージカル劇団ケセラ・セラ「ミステリーツアー」

評 荒木昭夫（京都児童青少年演劇協会）

「この演フェスには8年連続出演」とか。もうベテラン劇団さんなのですね。早変わりもあり、アドリブも自在とあって、軽快でした。

怪しげなスーパーマーケットの無料サービス「ミステリーツアー」。遊びの時間をたっぷりお持ちのおばさまたちの三途の川の「川遊び」。「地獄の沙汰のカネ次第」も、あざとく有って、風刺の心も見て取りました。

演者のみなさんも、それぞれに、適当なご高齢者と見ましたから、「地獄遊び」も人ごとでなく、逼迫した切実感も感じ取れて、笑えました。

ああこれは、下に「地獄八景」を敷いているな、とは思いましたが、それならばなお、もう一步踏み込んで、閻魔さんとも出会って欲しかったと、残念な思いを持ちました。

一般に「えんまさん」は「閻魔大王」と恐れられ、「嘘を吐くと舌を抜かれる」という「風説」で、脅されて来たものですが、親鸞（鎌倉時代初期）以降の浄土真宗では、仏法の認識が変わりました。閻魔さんは「善人を地獄に落とさないためにこそ、鬼卒の凶暴から守る「菩薩さまなのだ」と位置づけられて来ているのです。

閻魔さんが、お前は善人か、と問い、また嘘を吐いたな、となり、お前は悪人か、と問い、何を今、考えたのかと問い、真の悪人とは誰のことか、と問うているのです。

この解釈でこそ、—— 善人なおもて、往生を遂ぐ。いわんや『悪人』に於いてをや。（悪人なれば、尚のこと、『反省』することが深く、だからこそ極楽行きが当然なのだ。）——と説かれているのです。

そういう閻魔さんと、三人のおばさまとの、必死の問答にまで、突っ込んでくだされば、この「ミステリーツアー」はぐっと深まり、現代の名作となり得て、あなた方のモチレパとなる、と愚考致しました。受け止めていただけでしょうか。

——蛇足ながら。

ご出演の後、続いて行われた京都放送劇団の「扉の向こうで」を鑑賞なされて居られました。そして熱烈な拍手を送って居られました。

そのお姿にこそ、「ああ、やはり劇をするお仲間なんだ」と熱く打たれて居りました。